

現代青年の友人関係における 個人間の関係性の特徴と友人グループの特徴との関連

(中間報告)

神戸大学大学院人間発達環境学研究所／伊丹市立総合教育センター適応教室やまびこ館 石本 雄真

Relations between characteristics of interpersonal relationships and peer groups on contemporary adolescence

Graduate School of Human Development and Environment, Kobe University
/General Education Center, Itami City ISHIMOTO, Yuma

要 約

本研究は、現代の青年期の友人関係の特徴として指摘されるもののうち、個人間の関係の特徴であると考えられる友人との同調性の高さ、心理的距離の遠さと、集団としての特徴であると考えられる友人グループ境界の強固さとの関連を検討することを目的とした。中学生 175 名、高校生 214 名を対象に友人との同調性、心理的距離、グループ境界の強固性について測定した。その結果、心理的距離と強固性には関連があることが示された。中高、男女別に同調性、心理的距離、強固性それぞれの間の相関係数を算出したところ、中学生女子を除いて、心理的距離と強固性の間に弱い～中程度の正の相関がみられた。友人との心理的距離が遠いほど、グループ境界の強固性が高いことが明らかになった。

【キー・ワード】 青年期, 友人関係, 心理的距離, 同調性, グループ境界の強固性

Abstract

The present study examined the relations between features of interpersonal relationships: conformity with their friends and psychological distance to them, and feature of peer groups: personal permeability. The participants were 175 junior high school students and 214 high school students. Participants completed a questionnaire on conformity with their friends, psychological distance to them, personal permeability. The results were as follows: There were positively correlated with psychological distance to their friends and personal permeability.

【Key Words】 adolescent, friendship, conformity with friends, psychological distance to friends, personal permeability

問題と目的

2008年度、中学校の不登校生徒の割合ははまだ2.89%という高い値を示しており（文部科学省初等中等教育局児童生徒課，2009），継続的な減少へと転換する兆しはみられない。このことから，不登校児童生徒のさらなる増加を防止し，不登校児童生徒数を減少させるべく学校適応に関する議論・研究が喫緊に必要であるといえる。学校適応に対しては友人関係が大きな影響を与えることが示されているが（Aikins, Bierman, & Parker, 2005；Ladd, Kochenderfer, & Coleman, 1997；Stephen, Kelly, & Karen, 2008），これまで友人関係と学校適応の関連について検討した研究では，親密な友人がいるかどうか（酒井・菅原・眞榮城・菅原・北村，2002；田中・吉井，2005）や友人からの受容や拒絶（Berndt, Hawkins, & Jiao, 1999；Buhs, 2005；Wentzel & Coldwell, 1997；Zettergren, 2003）など，概して友人との関係が親密かどうかを指標としているものが多い。しかしながら，現代の日本の青年においては親密な友人関係が必ずしも心理的適応につながらないことが示唆されていることから（土井，2008；中西，2005，2008），友人との関係が親密かどうかだけではなく，より詳細に現代青年の友人関係をとらえる必要があるといえよう。この点に関して，近年青年期の友人関係の特徴として指摘される友人との同調性の高さ（唐澤，2001；上野・上瀬・松井・福富，1994），友人との心理的距離の遠さ（栗原，1989；松井，1990；大平，1995；千石，1985，2005），友人グループ境界の強固性の強さとそれによってもたらされるグループメンバーの固定化（赤坂，2009；土井，2008；國尾，2007；佐藤，1995）の3点が友人関係をとらえる1つの視点となりうると考えられる。実際にそれらのうち，同調性の高さと同調性の遠さの特徴から青年の友人関係をとらえ心理的適応や学校適応との関連を検討したものでは，それらの指標と学校適応との関連が示されており（石本・久川・齊藤・則定・上長・日瀉・森口，2009），現代青年の友人関係の特徴といった視点から友人関係と学校適応の関連を検討することの有効性が示されているといえよう。しかしながら，そのような個人間の特徴に対しては介入を行うことで変化を生じさせるのが困難であり，学校適応の向上に結び付けることが容易ではないといえる。一方，教師の指導行動が学級集団の構造と関連することが楠見（1986）によって示されていることから，集団としての特徴であるグループ境界の強固性についてはある程度の介入が可能であると考えられるものの，グループ境界の強固性に関する検討はほとんどみられない。本研究では，学校適応との関連が確認されている同調性の高さ，心理的距離の遠さといった個人間の関係性の特徴と集団としての特徴であるグループ境界の強固性が互いに関連するのかどうかについて検討し，グループ境界の強固性への介入が学校適応向上の手段となりうる可能性を検証することを目的とする。

方法

1. 調査対象者

兵庫県内の公立中学校に通う1年生男子93名，女子81名，性別不明1名，兵庫県内の公立高校に通う1～3年生男子37名，女子93名，性別不明1名，大分県内の公立高校に通う2～3年生男子

25名、女子58名。

2. 調査時期・調査方法

調査時期は2009年7～9月。各学校の教員に依頼し、クラスごとに担任の教員が実施した。

3. 調査内容

- (1) 友人への同調性尺度（石本ら，2009） 9項目
- (2) 友人との心理的距離尺度（石本ら，2009） 8項目 高得点であるほど心理的距離が遠いということを表し、希薄化した友人関係を持つことを示す。
- (3) グループ境界の強固性尺度 グループ境界の強固性は本来であれば第三者からの評定等、グループごとの特徴を測定する必要があると考えられるが、匿名性の問題やグループの構造をよく知る第三者の確保の困難さからそのような測定を実施することは難しい。そのため本研究では個々人が所属するグループのメンバーが、グループ境界をメンバーが越えることについてどの程度許容的かについて測定することでグループ境界の強固性をとらえることとする。黒川・三島・吉田（2006）、黒川・吉田（2007）による個人の集団透過性尺度、三島（2007）の排他性・親密性尺度、黒川（2006）の知覚された集団透過性尺度、三島（2008）の仲間集団志向性尺度を参考に7項目からなる尺度を構成した。なお、所属するグループについては「最も一緒にいる時間の長い友だちグループ」と教示をしたうえで回答を求めた。また、そのようなグループに入っていない場合については次の設問に進んでもらうよう求めた。

いずれの尺度についても「あてはまらない（1点）」から「あてはまる（5点）」の5件法で回答を求めた。

総合考察

1. 尺度の検討

グループ境界の強固性尺度について、I-T相関を参考に検討した結果、2項目を削除した5項目を用いた。5項目について主成分分析を行った結果、いずれの項目においても負荷量が.843～.654と高く、第1主成分の寄与率は54.34%であった。また α 係数は.785となり、項目数が少ないことを勘案すると概ね十分な値が得られた。これらのことから、グループ境界の強固性尺度は計5項目1次元構造の尺度として用いることとした。

2. 各変数間の相関の検討

性別、学校段階別に各変数間の相関係数を算出したところ、性別、学校段階別に相関の様相が異なることが示された（表1）。強固性と心理的距離の関連について、中学生男子、高校生女子では中程度の正の相関（ $p<.001$ ）、高校生男子では弱い正の相関（ $p<.01$ ）がみられたが、中学生女子ではほとんど相関がみられなかった。また、同調性と心理的距離の関連について、高校生男子、中学生女子では弱い正の相関（ $p<.01$ ）がみられたが、中学生男子、高校生女子ではほとんど相関がみられなかった。強固性と同調性の関連については、いずれの群においてもほとんど相関がみられなかった。

表1 各変数間の相関係数

学校種別	性別		同調性	心理的距離
中学生	男	強固性	.134	.493 ***
		同調性		-.055
	女	強固性	.098	.159
		同調性		.252 *
高校生	男	強固性	.149	.367 **
		同調性		.329 *
	女	強固性	.112	.413 ***
		同調性		-.030

*** $p < .001$ ** $p < .01$ * $p < .05$

ともに現代青年の友人関係の特徴であると指摘される個人間の関係性の特徴と集団としての特徴についてそれぞれ関連が予想されたが、強固性と同調性の関連はみられなかった。強固性が高いグループが多い場合、他のグループへの移籍可能性が減少するため現在の友人に対する同調性が高くなることが考えられるが、本研究の調査では本人の属するグループにおける強固性のみを測定したため、関連が示されなかった可能性が考えられる。このことから今後はクラス全体のグループの特徴を測定して検討を行うことが求められる。また強固性と心理的距離の関連について、中学生女子以外で有意な正の相関がみられた。友人との心理的距離が遠い場合、友人との関係をつなぎとめるものが弱いため、グループ境界の強固性を高めることでグループの一体感を得ていることが考えられる。一方、中学生女子のみ強固性と心理的距離の間にほとんど相関がみられなかったことは注目すべき点であろう。このことについて、女子にとって中学生は一般に友人グループを形成する時期であるため、たとえ個人間の友人関係としては心理的距離の近い関係であったとしてもグループとしては強固な境界を持つ必要があるといった事情が反映されていることが予想できる。しかしながら、本研究の調査からは詳細な分析が困難であるため、今後女子中学生の強固性や心理的距離についてより詳細な検討が必要であろう。

引用文献

- Aikins, J. W., Bierman, K. L., & Parker, J. G. (2005). Navigating the Transition to Junior High School: The Influence of Pre-Transition Friendship and Self-System Characteristics. *Social Development*, 14, 42-60.
- 赤坂真二 (2009). 女の子グループにおけるピア・プレッシャー 児童心理, 63, 328-332.
- Berndt, T. J., Hawkins, J. A., & Jiao, Z. (1999). Influences of friends and friendships on

- adjustment to junior high school. *Merrill-Palmer Quarterly*, **45**, 13-41.
- Buhs, E. S., (2005). Peer rejection, negative peer treatment, and school adjustment: Self-concept and classroom engagement as mediating processes, *Journal of School Psychology*, **43**, 407-424.
- 土井隆義 (2008). 友だち地獄——「空気を読む」世代のサバイバル—— 筑摩書房
- 石本雄真・久川真帆・齊藤誠一・上長然・則定百合子・日潟淳子・森口竜平 (2009). 青年期女子の友人関係スタイルと心理的適応および学校適応との関連 発達心理学研究, **20**, 125-133.
- 唐澤由理 (2001). 男子高校生の友人との同調的行動と心理的距離:友人と共に居ることによる安心感 学校メンタルヘルス, **4**, 49-54.
- 國尾一樹 (2007). 空気が読めないといじめられる情報戦, 心理戦の毎日 日経 Kids+, **25**, 20-23.
- 黒川雅幸・三島浩路・吉田俊和 (2006). 仲間集団から内在化される集団境界の評定 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(心理発達科学), **53**, 21-28.
- 黒川雅幸・吉田俊和 (2007). 個人の集団透過性に関する構成概念妥当性の検証 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(心理発達科学), **54**, 1-10.
- 楠見幸子 (1986). 学級集団の大局的構造の変動と教師の指導行動, 学級雰囲気, 学校モラルに関する研究 教育心理学研究, **34**, 104-110.
- 栗原 彬 (1989). やさしさの存在証明——制度と若者のインターフェイス—— 新曜社
- Ladd, G. W., Kochenderfer, B. J., & Coleman, C. C. (1997). Classroom Peer Acceptance, Friendship, and Victimization: Distinct Relational System That Contribute Uniquely to Children's School Adjustment? *Child Development*, **68**, 1181-1197.
- 松井 豊 (1990). 友人関係の機能 斎藤耕二・菊池章夫(編) 社会化の心理学ハンドブック:人間形成と社会と文化 川島書店 pp.283-296.
- 三島浩路 (2007). 小学校高学年児童の友人関係における排他性・親密性と学校適応感との関連 東海心理学研究, **3**, 1-10.
- 三島浩路 (2008). 仲間集団指向性尺度の作成——小学校高学年用—— カウンセリング研究, **41**, 129-135.
- 文部科学省初等中等教育局児童生徒課 (2009). 平成 20 年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」結果 (小中不登校等) について <http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/21/08/1282877.htm>
- 中西新太郎 (2005). ポジションどり文化の生きづらさを越えて 生活指導, **612**, 42-49.
- 中西新太郎 (2008). 少年少女の孤立と友だち階層制 生活指導, **659**, 42-49.
- 大平 健 (1995). やさしさの精神病理 岩波書店
- 酒井 厚・菅原ますみ・眞榮城和美・菅原健介・北村俊則 (2002). 中学生の親および親友との信頼関係と学校適応 教育心理学研究, **50**, 12-22.
- 佐藤有耕 (1995). 高校生女子が学校生活においてグループに所属する理由の分析 神戸大学発達科学部研究紀要, **3**, 11-20.
- 千石 保 (1998). 日本の高校生——国際比較でみる—— 日本放送出版協会

- 千石 保 (2005). 日本の女子中高生 日本放送出版協会
- Stephen, A. E, Kelly, S. F., & Karen, L. B. (2008). Early Adolescent School Adjustment: Associations with Friendship and Peer Victimization. *Social Development*, **17**, 853-870.
- 田中良仁・吉井健治 (2005). チャム体験と家族凝集性が学校接近感情に及ぼす影響 心理臨床学研究, **23**, 98-107.
- 上野行良・上瀬由美子・松井 豊・福富 護 (1994). 青年期の交友関係における同調と心理的距離 教育心理学研究, **2**, 21-28.
- Wentzel, K. R., & Caldwell, K. A. (1997). Friendships, peer acceptance, and group memberships: Relations to academic achievement in middle school. *Journal of Educational Psychology*, **90**, 202-209.
- Zettergren, P. (2003). School adjustment in adolescence for previously rejected, average and popular children. *British Journal of Educational Psychology*, **73**, 207-221.